



2021  
No.  
**123**

**企画展** 企画展  
P1～P3 大津のどうぶつ博物館

**学芸員のノートから** TOKYO1964  
P4～P5 ～大津に聖火がやってきた～  
こぼれ話

**収蔵品紹介** 京極高次書状(九月十二日付)  
P6 (尾花川親友会共有文書・本館寄託)



**大津市歴史博物館**

令和3年6月11日 発行

〒520-0037 大津市御陵町 2-2

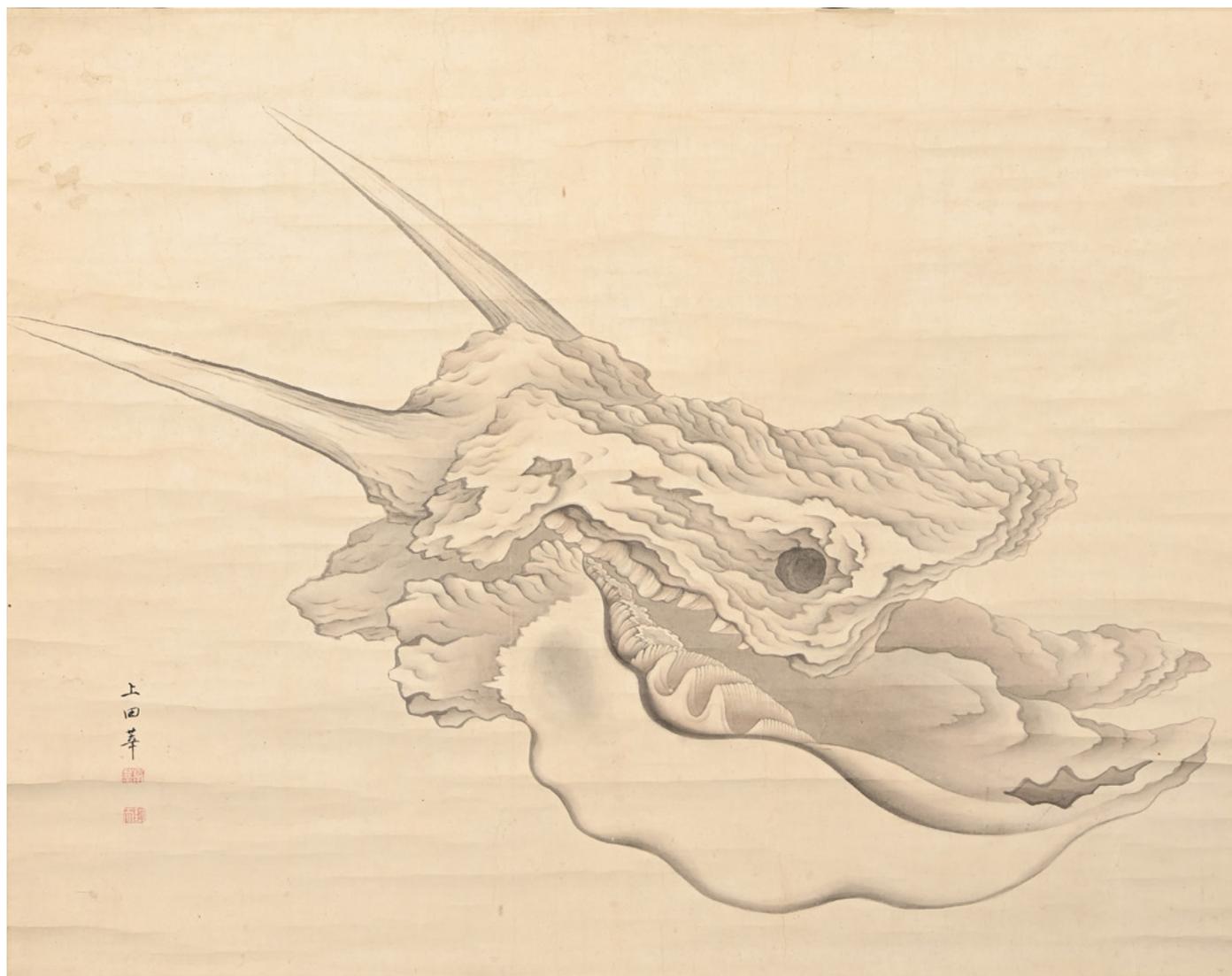
TEL(077)521-2100

<http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/>

企 画 展

## 大津のどうぶつ博物館

会期: 令和3年7月17日(土)～8月29日(日)



## 眠りから覚めた龍：龍の正体は展示会場で

文化元年（1804）11月8日、近江国滋賀郡南庄村（現大津市伊香立南庄町）の住人である市郎兵衛が、新田を開墾している最中にある化石を発見しました。市郎兵衛はそれを自宅に持ち帰り、軒下に置いていたところ大変な話題となり、多くの見物人が訪れました。代官へ届け出ると早速検分が行われ、大変珍しいものであったため、当時の膳所藩主であった本多康完公に献上されました。

持ち込まれた化石に康完公は大変驚き、家臣たちにこの化石について調べさせました。その結果、全員が口を揃えてこう言いました。「これは龍の骨である」と。

本展では、この時に発見された龍骨（原品：国立科学博物館蔵、レプリカ：伊香立香の里史料館蔵）を出発点とし、造形化されたどうぶつたちによって、大津の歴史をひも解いていきたいと思ひます。



伏龍祠（化石が発掘された場所に建てられた祠）  
大津市伊香立南庄町

## 琵琶湖にまつわる伝説：倭藤太のムカデ退治

滋賀県にお住いの方であれば、一度は「倭藤太のムカデ退治」というお話を聞いたことがあるかもしれません。倭藤太とは、平安時代に実在した藤原秀郷という人の別名で、大津にまつわるお話です。

昔、瀬田の唐橋に大蛇が横たわり、人々は恐れて橋を渡れませんでした。しかし、倭藤太が大蛇を恐れず踏んで通り過ぎたところ、大蛇はその勇気を感じ、三上山に棲むムカデを退治してほしいと頼みます。ムカデは三上山を7巻半するほどの大きさでしたが、倭藤太は恐れず、弓矢でもってムカデを退治します。実は大蛇は琵琶湖に住む龍神で、そのムカデに困っていたとのこと。龍神は倭藤太を龍宮へと招待し、お礼に様々な宝物を与えたと伝えられています。

現在、瀬田の唐橋のもとには、橋守神社（勢多橋龍宮秀郷社）があり、琵琶湖に棲む龍神と藤原秀郷を祀っており、傍の雲住寺には、藤原秀郷にまつわる宝物が今も大切に保管されています。



倭藤太百足之由来 雲住寺蔵

## 自動車のご先祖さま：街道を行き交うウシとウマ

ウシやウマは古来より人や荷物を運び、人々の生活の助けとなるどうぶつで、それは大津においても例外ではありません。かつて大津の町は、東海道と北国街道が合流する街道の宿場町として栄えました。その街道で人や荷物を運んでいたのがウシやウマで、その様子は歌川広重による「東海道五十三次」などによって知られます。

当時、大津から京都へと向かう道は、逢坂峠・日岡峠という2つの峠を越える大変な難所でもありました。そこで考えられたのが、石を敷設して荷車を通りやすくすることでした。つまり、現代の道路のように道が舗装されていたのです。これは「車道」などと呼ばれ、大津と京都を結んでいました。

近代化に伴い、この車道は撤去されてしまいましたが、当時としては画期的なこの車道の痕跡は、今でも各所に残されています。



【保永堂版】東海道五拾三次之内 大津 歌川広重画（本館蔵）

## 人知を超えた力の象徴：崇められ、祀られるどうぶつ

古来より神道や仏教を厚く信仰してきた大津の町には、数多くの神社・仏閣が存在します。そして、そこを訪れると実に多くのどうぶつ達に出会うことができます。

日本人は自然をはじめとした超常的な存在を神と考え、どうぶつ達をその神のお使いとして重要視していました。代表的なものがキツネ（稲荷）、シカ（春日、鹿島）、ウシ（北野）、カラス（熊野）などです。そして大津では、サル（日吉）やウサギ（三尾）が知られ、日吉大社や三尾神社には、サルやウサギにちな因んだものも多く見られます。

一方の仏教では、仏・菩薩など人を超えた存在や、厳しい修行の果てに得られる不思議な力を、人々は様々などうぶつ達を通してイメージするようになりました。その結果、仏や菩薩をはじめとしたホトケは、様々などうぶつ達に乗り、また逆に、頭にどうぶつ達を乗せる姿で表されるようになりました。例えば、文殊菩薩や普賢菩薩はそれぞれ獅子、白象に乗る姿が一般的です。また、薬師如来の眷属である十二神将は、頭の上に十二支のどうぶつがそれぞれ乗っています。さらには、歓喜天のように人の体にゾウの頭という姿で表されるホトケもあります。

このように、神道や仏教では、人知を超えた超常的な存在として、どうぶつ達が崇められ、祀られているのです。

もの」や「よいきざし」を意味しますが、それが中国で発展し、日本へもたらされました。

例えば、龍は古来より中国の皇帝や日本の天皇といった権力者の象徴であると同時に、水神としての性格も持ち合わせており、勇壮な姿で表されます。また、鳳凰は風神とされ、聖人君子が世に登場する際に現れる瑞鳥とされます。そして、コイは滝を登ると龍に変化すると考えられ、特に、龍門という中国の急流を登るコイのことを「登龍門」と称し、立身出世を願うために多く描かれます。これら以外にも、非常にたくさんのどうぶつにまつわるモチーフが取り入れられています。

祭は本来、神仏に捧げ、御霊みたまを慰めるために行われました。そのために人々は、様々などうぶつ達の姿に祈りをかたく仮託し、豪華絢爛に飾り立てたのです。



曳山からくり（登龍門） 龍門滝山（太間町自治会）

本展は、美術品や考古遺物などに表されたどうぶつ達の姿を追いながら、大津の歴史をひも解いていくことをテーマにしています。ぜひ会場で実物をご覧いただき、様々などうぶつ達に込められた人々の祈りや願いを感じていただければ幸いです。（学芸員 鯨井清隆）



猿の飾瓦 瀬田・青嶺寺蔵

### 祭を彩る：どうぶつは縁起物

大津の街中で執り行われる「大津祭」は、13基のひきやま曳山ごうかけんらんが練り歩く豪華絢爛な祭で、国指定重要無形民俗文化財に指定されています。そんな祭に欠かすことができないのが数々のどうぶつ達です。

古来より、人より優れた運動性を発揮するどうぶつ達には、不思議な力があると信じられてきました。そして、さまざまなものにそのどうぶつ達の姿を取り入れ、その不思議な力にあやかりとしたのです。その内の1つが「吉祥」という考えです。もともとは仏教用語で、「めでたい

## TOKYO1964 ～大津に聖火がやってきた～ こぼれ話

## 1年越しのロビー展

令和3年4月20日から5月30日まで、博物館エントランスを利用して「ロビー展 TOKYO1964～大津に聖火がやってきた～」を開催しました。昭和39年（1964）9月29日～30日、滋賀県内を通過したオリンピックの聖火リレーが、大津市を通過する様子を紹介する内容です。

本企画は、東京オリンピックの聖火が再び大津にやってくる（最近では長野五輪の際にも聖火が来ました）にちなんで企画しました。当初は、昨年春の企画として準備していましたが、新型コロナウイルス感染症拡大により、1年の延期を余儀なくされました。感染状況が日々変化するなか、催しが開催できたのは、前回の聖火リレーに関わった方々から、企画実現に大きな後押しをいただいた賜物です。トークイベントへの協力など、お手伝いいただいたすべての方々に、この場を借りてお礼申し上げます。

57年の月日を経て、大津でのリレーの様子をご覧いただくことは、当時の写真や記録、思い出などを集める絶好の機会になりました。今回は、ロビー展開催を通して集まった情報から、印象に残った事柄をいくつかご紹介します。

## アルバムの中に残る写真

滋賀県内の聖火リレーは全43区間。今回は、そのうち大津市担当分9区、瀬田町（昭和42年に堅田町とともに大津市と合併）担当分3区の全12区間について写真収集を試みましたが、最終的には、なんとか約半数の区間の写真を集めることができました。

企画開始時、博物館が所蔵していた市内の聖火リレーの様子を記録した写真は10枚程度でした。その後、当時の関係者などから写真の提供を受け、最終的には80枚くらいの写真が確認できました。展示では30枚程度を選んで、みなさんにご覧いただきました。

写真を収集して感じたのは、カメラや写真の貴重さでした。当時は、現在のように携帯電話についたデジタルカメラで誰もが簡単に写真を撮ることのできる時代ではありません。実際、写真に写る沿道の声援の様子を見ても、カメラを構えている人はそれほど多くありません。

今回、ある聖火ランナーの方のアルバム写真をお借りしましたが、貼ってある写真は家族が撮られたものではなく、沿道で撮影された方からリレー後に贈られた写真ばかりだと教えていただきました。アルバムには、サイズがばらばらな写真が貼られていて、リレーの様子だけでなく、当時の写真事情までもが読み取れます。なかには、当時まだ普及率が低かったカラー写真も含まれていて、オリンピックという特別なイベントをきちんと記録しようという意気込みが伝わります。また、リレーが終わった後に選手同士の家族とともに撮った記念写真も印象に残る写真です。



大津市役所前（浜大津）での受け渡し 個人蔵



リレー後の記念撮影（膳所神社） 個人蔵

## 57年前の大津のすがた

写真には、今と昔のまちの様子の違いも記録されています。前回の東京オリンピックが行われた昭和39年は、前年の名神高速道路の開通や、オリンピックにあわせて開通した東海道新幹線（10月1日開通）をはじめ、国内の交通網が急速に整備されていきました。

これは滋賀や大津にとっても同様です。昭和39年9月

27日、琵琶湖大橋が開通しました。このことは琵琶湖の東西交通の利便性が向上する、県民にとって大きな変化でしたが、この橋が開通した日は、大津市に聖火リレーが通過する2日前にあたる出来事でした。橋の紹介文に「オリンピックに間に合うように開通した」と書かれていることが多いのは、このことだったのかと個人的には納得した発見でした。

また、橋が開通した27日と聖火が大津で1泊した29日には、いずれも県庁前にあった滋賀会館（昭和29年開館）で記念の催しが開かれました。入口看板として設置されたゲートは、文字を書き換えて再利用していたというおまけ情報も、写真や新聞記事で分かりました。



滋賀会館前の様子（右下がゲート） 本館蔵（谷本勇撮影）

滋賀会館や大津市役所の旧庁舎など、今では見ることのできない町の風景と、祝祭に湧く沿道の大勢の人々とともに見ていると、当時のまちの活気が伝わってきます。

### 大津・石山で作られたユニフォーム



聖火ランナーが身に着けたユニフォーム 個人蔵

また、今回驚きだったのは聖火ランナーのユニフォームでした。「胸のワッペンは、ユニフォームとは別々に支給され、家族に縫い付けてもらった」というランナーの方の思い出も興味深かったのですが、それよりも驚いた

のはランニングシャツの素材でした。ざっくりとした編み柄でできた生地は、手に取るとどっしりした厚い生地ですが、タグには素材は東レの「パイレン」と書かれています（製造はミズノ）。この素材は、ポリプロピレンを主材料にした化学繊維で、調べると石山の東レ滋賀工場でしたか製造されていないことがわかりました。シャツの生地は、いくつか種類があったようですが、少なくとも大津を走ったランナーの生地は、地元大津で作られたものだったようです。

### 聖火リレーがもたらしたもの

最後に、聖火リレーがもたらしたものを2つ紹介しましょう。ひとつ目は、大規模イベント時の市民のおもてなしです。大津市では、聖火リレーにあわせて「花いっぱい運動」を市民へ呼びかけ、学区婦人会を通じてフラワーボックス380個分の花を育成し、当日、ランナーが通過する沿道に並べて歓迎の意を表しました。こうした取り組みは、その後、全国的なスポーツ大会や催しの際にも引き継がれ、その度に来訪者を迎える花が、市内にあふれるようになりました。町を歩くと見ることのできる、様々な催しのステッカーが貼られたプランターはその証しです（博物館では昨年、光秀大博覧会のプランターで桔梗を育てました）。



市内に残る「ねんりんピック'90びわこ」のプランター

また、聖火リレーは、国体などでも同様のリレーが行われていますが（国体では炬火リレー<sup>きょか</sup>といいます）、オリンピック後、市内の学区運動会などでも、開会時に聖火リレーを行うことが流行し、イベントを通して、人々の結びつきに一役かったそうです。聖火リレーは、それだけ人々の印象に残る出来事だったのでしょう。

1年越して開催に至ったロビー展でしたが、展示をご覧になられた方々からも、新たな写真や情報がいくつも寄せられ、様々な情報が蓄積されました。普段の調査はもちろん、こうした状況のなかでも途切れることなく、展示や発信を行うことの大切さを再認識しました。こうしたロビーを活用した展示は、今後も企画する予定です。

（副館長 木津勝）

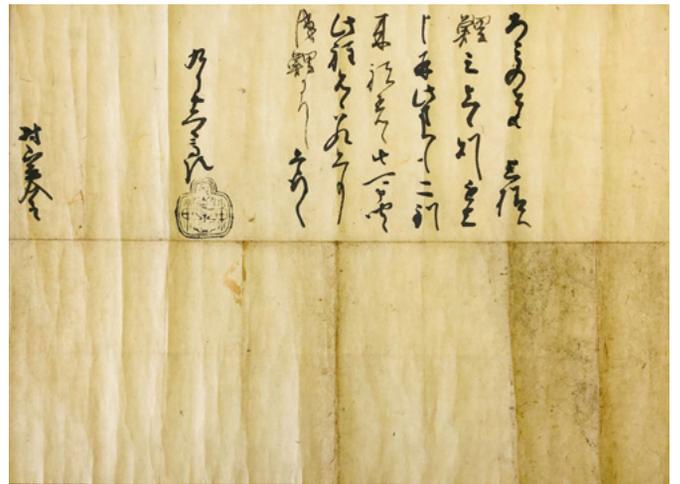
京極高次書状（九月十二日付）（尾花川親友会共有文書・本館寄託）

当館でお預かりしている尾花川親友会共有文書のなかに、大津城主京極高次きょうごくたかつくの書状があります。京極高次（1563～1609）は室町時代の北近江守護京極氏出身で、文禄4年（1595）8月頃に大津城主となり、関ヶ原の戦いの際に大津城に籠城して西軍（石田三成方）の足止めをしたことを賞され、戦後には若狭国小浜（現、福井県小浜市）に加増転封されました。高次の妹（一説には姉とも）の籠子は豊臣秀吉の側室です。また、高次正室である初は浅井長政と織田信長妹の市の次女であり、姉は秀吉側室の茶々（淀殿）、妹は徳川秀忠正室ごうの江です。高次は母や妻を通じて三英傑と呼ばれる織田信長、豊臣秀吉、徳川家康きやうと密接に関わった人物でした。

この高次書状は軸装され、木箱に入れられており、大切に保管されてきました。書状のあて先の村山兵介は高次家臣と考えられます。手紙の日付は「九月十二日」とだけあり、年号はありません。署名と本文の筆跡が同じであることやほかの高次自筆書状の筆跡から、本書状は全文高次の自筆であると考えられます。通常、大名が出す文書は右筆ゆうひつが記す場合がほとんどです。大名が自筆で書く場合は、特に重要な事柄を伝えたり、相手に親しみを示したりする目的があったと考えられます。

内容は、「あミ（網）の者共」が鯉3匹を「上様」に献上し、高次にも鯉2匹を贈ってくれたことに感謝し、近頃見たことないほど見事な鯉であると感嘆しているものです。高次が大津城主であった時期に「上様」と呼ばれる人物は豊臣秀吉しかいません。したがって、本書状は高次が大津城主となった文禄4年8月頃から秀吉が亡くなる慶長3年（1598）8月までに出されたものであり、「九月十二日」という日付から文禄4年～慶長2年までに出されたものであることがわかります。

高次の署名の下には山形のちょっと変わった形の黒印が押されています。当時の印には何かの言葉を記したものの（故事成語や自分の名前など）と、言葉ではなく単に形をかたどったものの2つがありました。前者は織田信長が使用した天下布武印が、後者は豊臣秀吉が使用した系印が有名です。では、この京極高次が使用した印はどちらでしょうか。私の目には何と書いてあるか全く読めません。なんとなく上部の出っ張ったところが顔のように



京極高次書状（九月十二日付）  
尾花川親友会共有文書・本館寄託

見えるので、形をかたどったものと思いますが、いかがでしょうか。

実は、この印は高次の子である忠高ただたかも使用しています。忠高は数え年17歳という若さで高次の跡を継いで小浜藩主となっています。忠高は高次の跡を継いだ直後にこの印を使用しており、親と同じ印を使うことにより、自身が先代の地位を正当に継承したことを示すねらいがあったと考えられます。

この高次書状は尾花川の人々にとって大変重要な資料でした。宝暦12年（1762）2月には当時大津を支配していた京都町奉行に尾花川の網方が



黒印部分拡大

この高次書状を見せています。また、尾花川の由緒書等にもこの高次書状は書き写されており、尾花川の漁業のルーツともいべき資料であったことがわかります。

城主自らが礼状したたを認め、献上された鯉を近年まれにみる見事な鯉であると絶賛する、高次の喜びが手に取るようにわかります。それとともに、高次が尾花川の漁業をいかに重要視していたかがうかがえます。この高次書状は、尾花川の江戸時代における発展の基となる重要な資料であるといえるでしょう。

（学芸員 五十嵐正也）